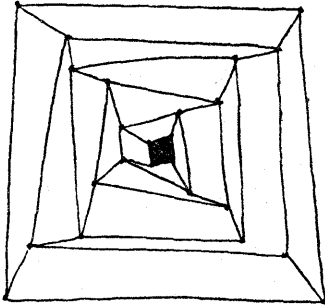


エリクソンと幼児教育 (13)



仁科 弥生

同一性形成と青年期

前回では、同一性形成の過程において、幼児期と社会が果たす役割について考察した。今回、青年期を問題にすることは、「エリクソンと幼児教育」というテーマからいえば範囲を外れることになる。しかし、先にエリクソン理論の中心的概念である同一性を定義するにあたって触れたように、すべての同一性の各構成要素が、青年期において最終的なまとまりを獲得すると仮定されていることを思えば、青年期を抜きにして同一性の形成を語れないことは明らかであろう。それどころか、同一性の形成過程は、幼児童期における断片的な経験が、青年期において自我によって選択的に再生、要約され、新しいまとまりをもつ経験へと再統合される過程であると要約できる同一性の概念にとって、青年期はとりわけ重要な意味をもつといっても過言ではないのである。

事実、エリクソンは、同一性の確立を青年期の発達課題であると考えている（『幼児期と社会』）。彼によれば、

青年は、幼児童期における同一化のすべてを、そして同一性の全構成要素を、イデオロギー的前提、歴史的要素、社会的役割に一致するように再統合し、新しい同一化に配列しなおさなければならないという。いいかえれば、人は、青年期において、自己の本質的な特性について、周囲の期待や要請との関係において問いなおし、これからどういふ役割と目標にむかって歩いて行こうとするのかをみきわめなくてはならないのである。

一方、同一性の確立に失敗すると、青年は同一性の拡散や社会的役割の混乱に陥ると考えられている。そして、同一性の感覚の全面的な喪失は、「自分が誰であるかわからない」という感情として表現されるという。その場合、自分自身の中の持続的な斉一性と連続性の感覚は失われ、社会的役割をになう自信もなくなってしまうという（『幼児期と社会』）。したがって、同一性の確立には、過去において準備された自己の内的な斉一性や連続性と、これからかわると予測される外的な、つまり社会的な自分の存在の意味、たとえば「職業」という実体

的な契約の形で明示されるような自分の存在の意味とを一致させることができるかどうか重要な鍵となるのである。

ところで、ニューマンらは、エリクソンの理論が対象とする青年期は厳密に言えば青年期後期に対応するものであると指摘する。たとえば、同一性の確立という課題は、大学生段階の青年の関心を正確に反映するだろうが、それをそのままと若い青年にあてはめて考えることは不適當であろうと述べている（『生涯発達心理学』）。そして彼らは、エリクソンのいう同一性の確立を個人的同一性の発達としてとらえ、その先駆をなすものとしての仲間集団の同一性の発達を青年期前期の課題としてあげている。これも一つの見識であろうと思われる。

では、エリクソンは、青年期のどのような側面をとくに注目しているのであろうか。以下、そのような観点から述べてみよう。

人は、成人期に、生涯にわたって自分の社会的状況を

決めることになる職業や結婚相手、価値観、政治思想などを選ぶことになる。このような重大なことがらを選び、或は決定する前に、そのために必要な準備過程に入る。それが青年期である。そこで、青年は自分の能力や興味と、理想とする社会的役割とをどのように結びつけることができるか、はじめて現実的に模索しはじめる。

たとえば、自分の素質に適した職業的モデルを見いだそうと努力する。しかし、自分の生涯をかける職業の獲得、つまり一つの職業的同一性に定着することは容易にできることではない。その間、まさに自己発見の可能性と自己喪失のおそれとが背中あわせになって青年を不安に陥れる。このような状態を、エリクソンは同一性の危機と呼んでいる。この場合、「危機」は、いわば病の峠のようなもので、良い方向へ進むか、悪い方向へ進むかの分岐点、誰もが避けては通れない転回点という意味で用いられている。そこで、「良い」方向へ進めば、青年は、自分が本当になりたいと思っっている希望と周囲の期待とを一致させることができ、のびやかに、たくまし

く、率直に、そして実際的に自己実現を果たしていく。一方、「悪い」方向に解決されると、同一性の混乱が長引いて、青年ははつきりとした病的な症状や退行などの同一性拡散症状を示すようになるという（『自我同一性』）。

そして、そのように危機が悪化する原因として、幼児期における自律性や自己統制能力、また自発性などの発達が何らかの理由で十分でなかったという個人の側の要因や、青年期に出会う価値があまりに矛盾していたり、不適當であったという社会の側の要因があげられている。しかし、同一性の確立にとっては何といっても、個人内部の激しい発達の变化や、外的諸条件の変化に直面しながら、斉一性と連続性をもちつづける自我の強さとしなやかさがもつとも核心的問題であることはいうまでもないであろう。また、悪化した同一性の危機は、自我の統合の一過程であって、最終的には良い方向へむかうものと想定されている。つまり、エリクソンは、同一性の危機を、青年時代から成人期前期にかけて起こる、人

が大人の役割を身につけるために経なければならぬ正常な発達の過程と考えているのである（『自我同一性』）。一九五八年に出版された『青年ルター』は、俊才の青年ルターがいかに同一性の危機を克服したかを実証した彼の労作である。

以上のように、青年期に至って、人ははじめて同一性の危機に直面する。しかしながら、同時に、それを克服するための知的、精神的、社会的条件もとのうのである。知的側面についていえば、たとえばピアジェによれば、この時期の知的発達の特徴は「形式的操作」ができるようになる段階である。青年はもはや具体的内容に束縛されずに、仮説をたて、仮説にもとづいて考えを操作できるのである。この思考能力の高まりとともに、青年は、幼児童期における同一化や同一性のすべてを疑問視するようになる。そして同年齢の仲間や家族以外の指導的な人物に新しい同一化の対象を求め、自らの新しい同一性を定義しようとする。また家庭や学校という身近な環境の外に新しい可能性をさぐり、さまざまな価値や思

想を検討することに熱心になる。このようなことは自己の同一性の確立には不可欠の条件であろう。

また、青年時代はもともと純粹に価値を追い求め、これに従って生きようとする時代であるとよくいわれる。エリクソンは、この時期に生まれる自我の特性を誠心と呼んでいる。青年には、忠誠を求める殆ど本能と呼んでもよいほどのものがあり、青年は忠実になれるイデオロギイの展望や人物を探し求めるといふ。（エリクソンの場合、イデオロギイとは、政治的現象そのものではなく、社会が、明確、不明確な形で青年に提示する理想像の体系や思想的枠組を意味するようである。そして、忠誠とは、価値体系の矛盾にもかかわらず、青年が自ら選んだものに忠節をつくす能力であると定義されている。『洞察と責任』）。そして青年は自分の能力をためすさまざまな経験に参加し、自分自身をはじめ、自分にとって意味のある人々や集団、またその規律などに忠実に服することによって成熟していく。また、自ら選び、真理であると信ずるものを擁護するために全エネルギーを捧げ

る。その結果、献身、自己犠牲という強さが生まれると
いう。その場合、堅固なイデオロギーや支えてくれる大
人や信頼できる仲間の存在がその源泉として重要である
ことが強調されている。したがって、同一性は忠誠心の
発達を一つの前提として青年期に確立されると考えるエ
リクソンの概念には、先にふれたニューマンらのあげた
仲間集団の同一性の発達という課題も包含されていると
いうことが明らかとなる。さらに、エリクソンは、忠誠
をつくす価値ある対象を青年に用意するのは大人の側の
重要な役割であることも示唆している。

さて、エリクソンが『幼児期と社会』の中で、青年
を、子どもとして学んだ道徳と、大人として発展すべき
倫理の中間に位置する心理社会的段階にあるととらえ、
その心理は「猶子期間」^{モラトリアム}の心理であると述べたことはよ
く知られている。彼は、青年期には、時間の圧力が一時
的に取り除かれ、若者たちに自由に活動のできる余地が
与えられている事実注目したのである。モラトリアム
とは、元来、法令で一定期間、債務者の支払いを延期さ

せることを意味する用語であり、それをエリクソンが心
理学に転用したのである。彼によれば、モラトリアムと
は、同一性にとって重要な意味をもつ、大人としての社
会とのかかわりが一時的に延期され、社会からの期待も
ゆるみ、青年には正の同一化の可能性が大になる期間で
あるが、同時に、青年が内省し、役割実験を試みる期間
でもあると定義されている。すなわち、青年の多くは、
既存の、或は将来の秩序の一断片に自分をかかわらせ
たり、或は限定してしまう前に、真理の奥底をきわめて
たいと欲する。また、変化の中に何か永続的なものを求
めようとする。或は社会から提供された同一性を自分が
本当に欲しているかどうか確信がもてるまで吟味しよ
うとする。社会のどこかに自分に適した活動分野を見いだ
そうとして、さまざまな試行錯誤を繰返すのである。そ
の結果、時には非行的、逸脱的、自己破壊的行動に走る
ことさえもある。そうして、社会の側も、そのような行
動の自由を青年に認め、挑発的、遊戯的行動も選択的に
許しているというのである。もっとも、それらは社会の

価値体系から大きく逸脱しない程度のものである場合が多いが。たとえば、古くは徒弟奉公期間が、そして現代では大学生活が一種のモラトリアムとして制度化されている。しかし当然のことながら、真のモラトリアムには期限があるのである。それが終わると、精神的で、目標志向的行動の段階が始まると想定されている。すなわち、青年は自分の能力を葛藤に縛られずに自由に駆使できるようになり、それを職業に生かしていく。同一性の形成過程が最終的に到達すべき目標は、職業や友人関係や伝統などから無限の資源を得て、やがて究極的関心（宗教）をもつに至ることであると、エリクソンは考えている。したがって、青年期が同一性の危機の段階であるからといって、同一性形成そのものは青年期にはじまるものでも、終るものでもなく、それは生涯つづく発達過程として概念化されていることも見落してはならない点であると思う。

ところで、エリクソンは一九五〇年から一九六〇年まで、マサチューセッツ州のストックブリッジにあるオー

ステイン・リッグス・センターで研究を続けている。実は、一九四九年に、カリフォルニア大学の理事会が、教官に課す一般誓約書に加えて、さらに忠誠の誓約書の提出を要求するという出来事があった。それは「勢力や暴力による合衆国政府の転覆を正しいものと信じて煽動し、或は教えるどんな党派もしくは組織も、私は信じません。その一員でもありませんし、また支持もしません。」という誓約であった。そして翌年には、その忠誠の誓約書を毎年署名して確認すると契約条項が変更された。エリクソンは、学究生活の中への煽動者の侵入という危険に対処するためのこのような空虚な宣伝行為に担することはできないとして、契約書に署名することを拒否して、カリフォルニアを去ったのであった。

そして、このオーステイン・リッグス・センターで、彼が「同一性の拡散」という臨床像としてとらえた患者たちとの出会いがあったのである。すなわち、そこでは、情緒不安定で、その動搖の統制ができず、また不安で無力化され、何になりたいのか、どこへ行きたいのか

も決めることができなくなり大学を去った若い男女が精神医学的「助け」を受けていた。エリクソンの解釈によれば（「自我同一性の問題」）彼らは、急激な技術革新や文化的、政治的変動の歴史の中で、これまた激しく対立し、或は変化する同一性の諸要素を自己の同一性として調和させることができずにいる若者たちであった。彼らは、急性の同一性の拡散状態を示し、深い空虚感や孤立感や不安感の中で親密な関係を結ぶことや、職業の決定などができなくなっていた。或は、形成途中の同一性を、イデオロギーのない指導や懲罰から防衛したいという欲求から、大学を離れていたいと思ひ、或は自分なりのやり方で自分に適する道を探そうとしていた。つまり、若者たちは、自己の同一性を確立する戦いの中で、進むべき道に行きくれて、しばらく自分で考え、自分なりに決定するための「時間」を欲していたのである。したがってエリクソンの仕事はまさに彼らに有意義なモラトリアムを与えることであつた。

このような患者が自己の同一性を確立するための治療

的要求として求めてきたものは、いつの時代でも、またいづこの若者も求める自己の理念の確立の要求と同一のものであらうという深い洞察がエリクソンに生まれた。さらにこの要求は歴史の中でも危機的な時代にはとくに顕著に示されるであらうという仮説から、彼はマルティン・ルターの生涯と信仰に深い興味をもつた。そしてルター自身の言葉やルターについて書かれた多くのものの中に、センターの若い患者の中に繰返してみてきた心の闘いと同じものを読みとつたのである。臨床家エリクソンの目に、修道院に行くことを決めた青年ルターと、オーステイン・リッグス・センターに助けを求めてやって来た若者の姿とが重なって見えたにちがいない。若者たちは、ルターが二三歳から三三歳になるまで、修道院でじつと待つたように、センターで時を過ごす必要があつたのである。

ルターは、修道士であり、異端者であり、究極的には偉大な宗教的政治家であつた。彼の父、ハンス・ルターはマンズフェルトの鋳夫であつた。貧農の出身であつた

彼は、子どもたちに大きな期待を抱き、教育を受けさせた。マルティンには、法律家となってこの世での成功者になることを望んだ。二二歳のとき、ルターは父の命令でエルフルト大学で法律の勉強を始めたが、急な「回心」を経験して、父親の願望を拒否し、修道院に入ったのである。ルターのその青年時代について、エリクソンは次のように解釈している。すなわち、修道院での深く没頭した禁欲生活の中に、ルターはあまりにも理不尽な要求をしてくる父親からの避難場所を見いだしたにちがいない。戒律厳守派のアウグスチン派の自分の上司に時間とエネルギーを完全に捧げることによって、彼の直面する誘惑や悩みは棚上げされた。また、自分の父に対して巧妙な形で反抗した息子は、修道院で、ことさら懸命に新しい宗教的上司に服従しようと努力したのであった。こうして、彼は長い沈黙と、意義深い儀式の生活の中で、苦しみ、考え、成長し、成人となり偉大な指導者となるための「時間」を過ごした。そして二〇代の後半に、新しい原理にたどりつくと、彼は一変して、福音を

伝える人となった。そして学生や修道士に対して説教や講義を精力的に行なうようになった。ついに彼は自分の才能と苦悩の両方を活かす道を見つけたのである。つまりようやく自分がなしうることを、自分が行おうとしていくことを明確に知った彼は、モラトリアムと決別して、活動的で生産的な成人の生活に入ってしまったのである。

現代の多くの青年たちも、青年ルターが直面したような「同一性の危機」を何らかの形で経験する。勿論、自分の将来や職業についての決意をルターのように劇的に固める者は決して多くはないであろう。しかし進むべき道をさがしあぐねて、まわり道をする若者は多い。このような青年たちを、怠け者、非行少年、神経症者など安易に診断したり、レットルをはったりすることをわれわれは慎まねばならないと、エリクソンは説いている。また、青年の逸脱した行動や、親の意に反する行動も実はモラトリアムを作り出そうとする彼らの試みであったりすることを親や周囲の人々は理解しなければならぬこと、そして青年が最終的に大人社会への職業的コミット

メントへと進むことができるようになるまで、親は彼らを支え、見守ることが必要であることの意味をわれわれに明示してくれるのである。

次回で、「精神分析のおよび歴史的研究」という副題をもつ『青年ルター』を中心にして、エリクソンが同一性の概念を駆使して行なったマルティン・ルターの分析をも少しくわしく紹介してみたい。

(津田塾大学)

〈筆者紹介〉

一九三〇年大分県生れ。一九五三年津田塾大学英文科卒業。
米国カールトン大学心理学科卒業後、アイオワ大学大学院修士課程修了。アイオワ児童研究所員をへて、現在、津田塾大学助教授。

